

「JENESYS2019」中国青年メディア関係者代表団第2陣 参加者の感想（抜粋）

第1分団（医療・介護）

○交流を通じて、日本はテレビや新聞といった従来型のメディアが依然としてメインとなっていることを知った。中国と同様にインターネットの攻勢を受けているとはいえ、近年でも安定したシェアを維持している。中国の従来型メディアとは、大きく状況が異なる。中国のメディアは各所で崖崩れ的な崩壊が起きており、5Gの運用が開始されれば、ニューメディアの攻勢は主客転倒にまで至るだろう。中国のメディアはまさに懸命に活路を求めているが、日本のメディアは現在の平穏の中で、将来の衝撃がいかほど深刻なものか、まだ実感がないようだ。現在、中国のメディアが直面している苦境も、今後10年のうちには、日本のメディアにも降りかかるだろう。

これと類似して、今後20年の中国の高齢者介護問題も、現在の日本に見る高齢化の加速という問題に直面するだろう。今回視察した、老後生活の体系や介護制度、介護テクノロジー分野の現実の取り組みやモデルは、とても参考になった。特に、青山里会の高齢者施設や鈴鹿ロボケアセンターのロボットなどは、非常に勉強になった。

○オリンパスミュージアムを見学し、カメラ部門はこの企業のごく一部分なのだと初めて知った。顕微鏡、内視鏡、望遠鏡などのメイン事業があり、細胞の一つ一つから壮大な宇宙全体までを見つめている企業なのだと知った。

高齢者介護や医療機関を複数視察した。さまざまな科学技術とヒューマンケアを同時に取り入れる介護の手法は、まもなく高齢化社会を迎える中国にとっても、大きな啓示となる。青山里会をはじめとする多くの医療介護機関で重視しているのは、高齢者の“尊厳のある”暮らしであり、いかにして平穏にお迎えを受け入れるか、ということである。彼らは高齢者をできるだけ社会から隔離せず、孤独な病院のベッドに寝かせたままにせず、社会から隔離した養老院に入れずに、たとえ介護や医療が必要でも、できるだけ自宅や地元に残そうとしている。彼らのこうした努力のあり方、高齢者の感情も十分にケアをしていることが、深く印象に残った。

日本テレビ放送網と中日新聞社での同業者との交流では、ともに業務について討論し、職業人生の苦楽、挑戦、チャンスなどについて、また、いかにして世論の立場を死守するか、ニューメディア時代への華麗なる転身をどのように実現するか、などについて、意見を共有した。この交流によって、互いに共感が得られた。

自由取材やホームステイでは、日本の一般の庶民と踏み込んだ交流ができ、厚い友情も結ぶことができた。まさに、日本人の言う“一期一会”である。しかし、ひとたび巡り合ったからには、ちょうど宇宙で二つの星が衝突したのと同じように、必ずやお互いに影響しあい、将来の軌道も変わってくるだろう。

○日本側の入念な手配により、日本の老後、医療、介護に関する事業所や研究所などを視察する機会に恵まれ、この分野に関する日本の現状について理解を深めることができた。

私自身も、業務では主に医療関連の報道を担当しており、日本の医療の現状も多少は理解している。タケダ、エーザイ、小林製薬などの日本企業への取材経験もある。今回の視察や取材ではさらに、日増し

に深刻化する高齢化問題に対し、日本では介護や医療の面で例えば居宅介護と在宅医療との連携など、さまざまな努力や試みをしていることを知ることができた。特に終末期の高齢者の介護においては、心のかもった手当をするだけでなく、高齢者が質の高い晩年を送れるようにし、さらには介護職の人々にも配慮して、介護者の負担や労働の軽減を図るような介護補助機器を開発する企業も存在している。このことが強く印象に残った。同時に、中国と日本の最も大きな相違点だと感じた。高齢者を介護するだけでなく、介護者のことも考慮するという点は、中国の状況と全く異なる。介護者の便宜をいかにより高めるか、という問題について、改めて中日双方で交流ができるのではないだろうか。

さらに、日本での在宅での終末ケアやリハビリ補助ロボットの研究に関しても、印象深かった。ともに高齢化社会に向かうという現状に直面し、双方により多くの交流の機会があることを信じたい。

○“テクノロジーは生活を変える。”これが、私が日本の医療介護機関や企業を視察して感じた、最も大きな実感である。先進的な介護ベッドや外出に便利な車いす等の機器は、高齢者に寄り添った心地良さを提供するだけでなく、介護職員の仕事量も軽減することができる。特に、アザラシや子犬型の人工知能ロボットは、高齢者の寂しさをなぐさめ、癒し、とても深いヒューマンケアを実現することができる。医療や介護が単純に衣・食・住・行動を解決するものに留まらず、高齢者に感情の癒しを与え、人生の最晩年に穏やかで心地よい生活を提供している。

どんなものでも参考になる。私は自らのペンを以って、日本での収穫を読者に、特に医療介護分野の友人たちに紹介し、中国の医療介護の業務をより一層改善していきたい。

○日本は高齢化率が25%以上に達する国で、中国と比べれば、より早期に高齢者問題の負担とプレッシャーに直面している。今回、地域密着の高齢者サービス事業所や医療との連携、医療機器メーカーなどを視察し、日本の医療介護分野について理解を深めた。重圧と言える高齢化の問題に直面し、日本は保険の普及を強大な支柱とし、詳細で入念なサービス体系を作り、高齢者の年齢(75歳以上と以下)や健康状態の違いに基づいて、個別の適切な介護サービスを展開している。高齢者が安心して晩年を過ごせるようにしていることに、非常に感動した。特に感動したのは、日本では民間企業や社会団体が次々と介護サービス分野に参入している点である。居宅サービスや在宅介護の例に見るように、日本の大多数の高齢者が自宅で老後を過ごし、臨終を迎えたいと希望する現状に対して、総合診療科の医師が在宅療養の高齢者を往診しケアを行う、あるいは末期がん患者や重症患者の終末ケアを行うなど、患者が平穏に、辛さを感じず、最後の日々を過ごせるようにしている。このことはまた、その家族にも生と死という深い教育を行うことになる。とても学ぶべき部分である。中国でも、ほとんどの高齢者が自宅で晩年を過ごす、生と死の認識や理解は日本とは異なり、多くは死への恐怖である。今回の訪日を通じて私は、より多くの全く新しい文化の思考を受け入れ、より健康的に、プラスの情報を伝えて行きたい。

第2分団（教育）

○我が代表団のテーマは“教育”であり、同時に、我々の仕事と関連深いTBSや西日本新聞社など、数社のメディアも視察訪問した。数日間の交流や視察を通じて、深い印象が残った。

1. 職業教育における“活用型”という理念。中国では、ほとんどの基礎教育が依然として“点数論”であり、“進学進級”が目標であって、教育の本質である社会的な意義の考慮や評価はやや欠けている。特に、視察をした子供の職業体験施設“カンドゥー”では、子供たちを楽しく遊ばせながら、職業や仕

事の責任と意義を体験させ、子供の将来の“希望の種”を埋没させない。こうした方法は、中国においてもとても高い参考価値があると思う。

2. 自ら攻勢し、従来型メディアの“地位を確保する”。中国の多くの従来型メディアと同様、日本の新聞やテレビもニューメディアの攻勢を受けている。では、いかにして“陣地”を守り、“メイン”を勝ち取るか？西日本新聞社での視察と交流の際、彼らの「こどもタイムズ」の紹介があった。生き生きとした形式で、子供や小学生の毎日の生活に新聞を“浸透”させ、さらに学校教育にも浸透させている。中国でも、多くの新聞やテレビメディアが子供記者団や青少年チャンネルを行っている。いかにして自社の資源をより効果的に活用するか、自ら攻勢して“地位を確保する”姿勢、これを深く考えねばならない。

3. 仕事への謹厳さと執着。TBS での交流で、一人のベテラン先輩記者の姿勢に強く触発された。彼はスクープを得るために、自ら関係機関の責任者の家を毎日、しかも朝晩一回必ず訪ねたそうだ。こうした真剣な、真面目な、執着のある精神が、非常に勉強になった。

○初めて代表団として日本を訪問し、深い印象と美しい思い出が残った。

まず、日本が幼児教育を重視している点である。子供の教育を教科書や授業だけで終わらせず、社会への関心や視野も養っている。これらは、我々も学び参考にすべきである。とりわけ、下関市立夢が丘中学校の訪問では、生徒たちが情熱的に入念にプログラムを準備してくれ、非常に味わい深いものとなった。両国国民の交流は青少年の肩にかかっている。中日の青少年が様々な方式や相互交流活動を通じて、理解を促進し、友情を深め、中日の美しい友好のために確固たる基礎を築くことを願う。

次に、メディアの一員として、TBS と西日本新聞社を視察した。日本の報道の理念と技術は、早くから中国でも知られており、特にテレビの影響力はとても大きい。見れば見るほど、日本の同業者たちの職業意識の高さと報道の理想への執着心を感じた。当然ながら、現代の情勢においてはインターネットの登場によって、ニューメディアが従来型のメディアを日々、おびやかしている。競争にしても提携にしても、中国はこの面では日本の先を進んでいる。とはいえ、まだ“手探りで川を渡る”状態であり、十分なモデルや参考対象はまだない。双方が共同で考え、ともに新時代のニューメディアとの融合という挑戦に対応して行かなければならない。

西日本で目に飛び込んできたのは、壮大な海原と麗しい山河である。萩市でのホームステイでは、一歩踏み込んだ交流体験ができた。私にとって日本滞在中の最も素晴らしい一夜であり、美しい思い出が残った。日本人の友好と善良な心は、我が代表団全員の心に深く浸透した。友情が長く続きますように、また会いましょう。

○1. 中国に比べ、日本の学校には人情味があり、子供たちの多様な個性の発展を重視している。中国の子供たちの宿題の量は日本よりはるかに多い。果たして成績だけが唯一の評価基準なのか、我々は改めて考え始めた。

2. メディアの面では、日本の新聞は依然として繁栄を続けていると知った。比較すると、中国のメディアのネット化のスピードはとても早く、これには根本的な要因としてニュースメディアの著作権保護の問題があると気付いた。中国のニュースはあっという間に転載され、大衆は新聞や公式ホームページチャンネルから情報を得る必要がない。この点を我々は重視し改善して、将来のメディアの生存環境を改善しなければならない。

3. 日本の子供たちは放課後にも数多くの課外活動がある。こうした課外活動は子供の知識を高めるだけ

でなく、生活や愛情も教えることができる。自分の身の回りをいかに管理し、家族のことを考え、いかにして他人や大自然と接していくか、ということを教えてくれる。このようにして育った多くの子供が自己調節管理能力を持ち、よりたくましく、楽観的に、積極的になる。中国の学校でも同様の活動が実施され、子供たちがより良く、よりバランス良く育つことを期待する。

○訪日視察交流を通じて、視野が広がり、見識が深まり、美しい中日の友情を得ることができた。

私の日本に対する全体的な印象は、人々の親切と節約心、清潔で美しい環境、発達したインフラ、至るところに見られるハイテクと人にやさしいヒューマンケアである。これらは明らかに国家としての高い素地の現れである。そして、これらの優れた点の形成はすべて、日本の教育理念に遡るものである。これが今回の訪日視察での最大の目的である。

訪日2日目、我々は文部科学省で地域と学校について講義を受け、理解を深めた。TBSでは、子供の頃に大好きだったウルトラマンを見て感激した。さらに、TBSの同業者との懇談では、64年のテレビ放送の“歴史の厚み”を感じるとともに、「未来へつなぐ。FromTBS」のプロモーションビデオから“はつらつと生みなぎる”様子を目にした。メディアはどこも視聴率の低下やニューメディアの攻勢を受けているが、互いに励ましあって前進することで初めて、先頭を切っていけるのだ。

訪日4日目、西日本新聞社を訪問し、「こどもタイムズ」に強い印象が残った。「こどもタイムズ」の設立の背景も学んだ。日本新聞協会は、児童や青少年の新聞離れやネット・スマホ依存に対して、“教育に新聞を導入”することを主導している。新聞社内では、編集部門と広告部門と販売部門が部門の壁を取り払い、「こどもふれあい本部」を立ち上げた。社長直属である。この行動と活動事例は、とても印象に残った。今後、自分の仕事においても子供が新聞を手取る時間を作り、子供に自分の記事を編集させ、多くの学校を訪ねてその講座を共有し、子供たちに新聞が身近にあることの重要性を感じさせて行きたい。そして、さらに発展してその親たちにも関心を向けさせたい。